

受けるよりは与える方が幸いである

—未来世代への責任— 使徒言行録 20 章 35 節

学院長 嶋田 順好

現代文明の底流には人をして倫理的に生きることを不可能にさせる欲望追求の力学が働いています。そこでは「受けるよりは与える方が幸い」（使徒言行録 20：35）ということが忘却され、「与えるよりは受ける方が幸い」ということにおいて野心的であれという時代になってしまいました。そのことで世界の人々が皆豊かになっていけばまだしも、現実的には少数の富める人々と多数の貧しい人々を生み出す社会が現出してしまっているのです。しかも現代人のあくことなき欲望追求のはてに、私たちの皮膚感覚としてもその異常さがリアルに感じられつつある環境問題が、もはや待ったなしの喫緊の課題として浮上してきています。

スウェーデンの少女グレタ・トゥーンベリさんが 2018 年 8 月、15 歳の時に、スウェーデン議会の外で「気候のための学校ストライキ」という看板を掲げ、より強い気候変動対策をとるようにとった一人と呼びかけたことがきっかけとなり、世界中の若者を巻き込んだ環境保護運動のうねりが生じました。彼女は、昨年 9 月 23 日には、国連気候行動サミットにも出席し、地球温暖化問題に真剣に取り組もうとしない大人たちに厳しい叱責の言葉を投げかけました。それに対しトランプ大統領も、プーチン大統領も皮肉をこめた冷淡な対応を示したにすぎませんでした。しかし、わたしには両大統領ともアンデルセンの童話に出てくる「裸の王様」であって、グレタさんこそは王様に向かって「だけど何も着てないよ」と真実を告げた「小さなこども」と思えてなりません。

ことにグレタさんが「若い世代はあなたたちの裏切りに気づき始めています。未来の世代の目は、あなたたちに向けられている」と語ったことが印象的でした。東京大学名誉教授で経済学者の岩井克人氏も「地球温暖化が深刻であるのは、各国の利益が対立しているからではありません。未来と現在の二つの世代の間の利害が対立しているからなのです。未来世代を取り巻く自然環境が現在世代によって一方的に破壊されてしまうからなのです」と鋭く指摘しています。ひらたく言い換えれば現代人が、自己の利益を追求することに一心不乱にのめりこんで膨大なエネルギーを使用し続けるあまり、その行動が、未来世代にどれほど大きな悲劇的つけをもたらすかということを十分に考慮せず、そのつけをどんどん未来世代に積み残す行動をとってしまっているというわけです。

岩井先生は告げています。「未来世代とは単なる他者ではありません。それは自分の権利を自分で行使できない本質的に無力な他者なのです。その未来世代の権利を代行しなければならない現在世代とは、未成年者の財産を管理する後見人や意識不明の患者の手術をする医者と同じ立場に置かれているのです。自己利益の追求を抑え、無力な他者の利益の実現に責任を持って行動することが要請されているのです。すなわち、『倫理』的な存在となることが要請されているのです。」

教育の営みは、未来を生きる園児、生徒、学生、院生を育む働きにほかなりません。それだけに目の前にいる園児、生徒、学生、院生たちが、10 年後、30 年後、50 年後に筆舌に尽くしがたい過酷な環境にさらされ、塗炭の苦しみを味わうことがないように十分に注意し配慮する倫理的責任が現在を生きる私たちにはあるのです。ことに教育に携わる者たちには、その自覚が強く求められているのではないのでしょうか。

その倫理の基本として主の年 2020 年に砕けた悔いた心で真剣に聴き入るべきみ言葉が「受けるよりは与える方が幸いである」という主イエスが残して下さったみ言葉にちがいません。私達一人一人が、主の導きのもと、未来世代のために何をよりよきものとして与えることができるのかということを実心で思いめぐらしつつ、それぞれの馳せ場で誠実に真摯に教育研究の営みに取り組んでまいりたく願うものです。